

女性にお知らせしたい 女性のための 保険提案

— 女性特有のライフスタイル・病気・医療の現状から見た
保険の勧め方を考える —

わが国の女性は、世界一の長寿を誇り、かつ経済力も年々向上していることから、長生きのリスクも万一のときのリスクも考えなければなりません。また、男性に比べて、結婚、出産、離婚、介護など人生のステージによって変化が大きい女性には、男性とは違った視点からリスクヘッジが必要です。そんな現代女性のライフスタイルや女性特有の病気などを踏まえて、女性から喜ばれる保険提案について解説します。

第1章 女性をとりまく環境の変化を読む

CFP® ● 山田静江

女性を生命保険販売のターゲットとして見た場合、押さえておかなければならないことは、ライフステージの変化によってライフスタイルやニーズが変わりやすいということです。とくに女性の社会進出が進んだことや社会の変化、女性自身の考え方や周囲の見方が変わってきたことから、その変化はよりダイナミックなものになってきています。保険の営業においても、その変化を十分に読み取った上で、の提案が大切です。

「女性に死亡保障は不要」はむかしの話

結婚や出産で仕事をやめる女性が多かった時代には、ライフステージごとのニーズの変化は、多くの人に当てはまるものでした。結婚や出産で専業主婦になれば収入はなく

なり、経済力は低下してしまうのが一般的。そのことから、女性に死亡保障はいらないといわれていました。

しかし、男女雇用均等法の施行以降、女性を戦力とみなす企業が増えたこと、結婚・出産後も女性が仕事を続けられる事情が整ってきたこと、そして婚姻率や出産率の低下で働き続ける女性が増えたことなどから、女性の労働力率は高まっています（図表1）。

夫より収入の多い女性や、年老いた親と同居して面倒を見たり、親を経済的に援助したりしている女性も増えてきました。また、教育費の増大で、専業主婦だった妻が子どもの成長後に再就職するのは当たり前になりつつあり、経済力のある女性は年々増加しています。

折りしもこの不況で、働き盛りの男性がリストラされたり減給になったりすることは珍しくありません。妻の収入は家計の大事な収入源のひとつ。女性だから死亡保障はい

第2章 事例に見る女性の病気とかかったお金

CFP® ● 山田静江

女性が病気で入院、手術となった場合、治療費その他どのような費用がかかるのでしょうか。経済的な面だけでなく、精神的な負担も気になります。家族や友人などの手助けも大きなポイントとなりそうです。病名や職業、家族構成の異なる3人の女性のケースをご紹介します。

CASE1

子宮筋腫（子宮全摘） 14日入院

**入院生活は楽しかったものの、
体力・気力は低下**

会員のA子さんは、40歳を目前に出血が続くなどの体調不良が続いたため産婦人科を受診したところ、子宮筋腫と診断されました。複数の筋腫があるケースで、①筋腫のみ切除、②子宮摘出、③しばらく様子を見る、の3つの選択肢がありましたが、手術となれば10日～2週間の入院が必要であり、当時、受験生の息子を抱えていたA子さんはしばらく様子を見ることに決めました。

年に数回は検査のため受診していましたが、だんだん筋腫は大きくなり、一番大きなものは子どもの頭部大に。出血もひどくなってきたので、手術を決意。筋腫の数が多いため切除では傷口が大きくなって回復が遅くなるということだったので、子宮全摘となりました。

仕事の都合で手術は7月初旬と決め、病院を予約し仕事のスケジュールを調整。手術前には月に1回、筋腫を小さくするためのホルモンを止める注射を受けました。注射や検査はお金もかかるし、そのために休みを取らなければならなかったのでやや負担に感じたそうです。

入院当日は、夫が休みを取って立会い、入退院の際にも自動車で送り迎えしてもらいました。入院中の家事は夫と息子で分担していたようですが、食事代などがかさみました。

月の初めに手術を受けられたので、入院時の医療費負担は1カ月の上限内（80,100円+α）で済みました。入院前は個室も考えたそうですが、同室の人たちがいい人だったの

で、そのまま差額ベッド代なしの6人部屋に滞在しました。出産後もずっと働き続けてきたので、入院はいい休養になったと感じたそうです。

退院後は5日目から出勤しましたが、1カ月は満員電車を避けるため時差出勤していました。体力には自信があるほうだったのに、手術後しばらくは体力・気力が低下し、仕事や家事のペースが遅くなり、疲れやすくなったことに本人もびっくり。

女性疾病特約付きの医療保険に入っており、受け取った給付金は、手術と入院で合計30万円。勤務先の社長の配慮で収入は減りませんでしたが、入院以外にかかった費用や目に見えない負担増まで含めると、「収支トントン」という印象です。

A子さん……手術+14日入院

42歳／会社員／家族：夫、子（高校2年生）

<かかった費用> 合計：約20万円+α

入院時の窓口負担：約8万5,000円

入院時食事代：1万400円

ホルモン注射：1万2,000円×4回

MRI検査：3万円×1回

その他：家族の食事代など雑費

<受け取った給付金等> 合計：30万円

医療保険 入院給付金：10万円（10日分）

// 手術給付金：20万円（20倍）

CASE2

盲腸をこじらせ腹膜炎 24日入院

思わぬ重病で大幅な収入減に

チクチクしたお腹の痛みを感じながらも、フリーで仕事をしている忙しさからそのままにしてしまったB子さん。ある日我慢できないほどの腹痛を感じて、近所の総合病院

第3章 お客さまへの“話材”になる 女性の病気トピックス

女性を取り巻く社会環境は、刻々と変化しています。その変化とともに、女性特有の疾患についても深く考える機会が増えており、世界各国でキャンペーンや運動が行われています。保険の加入促進をする際には、商品概要とあわせて疾患に関する正しい知識や予防方法のアドバイスを心がけてみてはいかがでしょうか？ イザというときに備えるだけでなく、イザという事態を未然に防ぐアドバイスをするのも、忙しい現代女性には大切な情報となるのです。

ピンクリボン運動（乳がん撲滅運動）

CFP® ● 飯田道子

厚生労働省の「人口動態統計」によると、壮年期の女性の死亡原因1位となっているのが乳腺に悪性の腫瘍ができたことで発症する、乳がんです。

乳がんには年間4万人の女性がかかると推定されており、2008年の1年間には、1万1,000万人もの人が乳がんにより亡くなっています。

とはいえ、乳がんは自分で発見できる数少ないがん。自分で触診し発見することも可能であるため、定期的にチェックをすることで早期発見が可能になります。乳がんを早期に発見し、早期治療に結びつけるためには正しい知識が必要です。そのためのキャンペーンとして誕生したのが「ピンクリボン運動」です。

ピンクリボン運動はアメリカから広まり、世界各国で乳がんの早期発見・撲滅運動が行われています。日本でのピンクリボン運動のキャンペーン活動は毎年10月に実施されており、ウォーキングによるキャンペーンの告知のほか、専門家によるトークショーが開催され、乳がんについての啓蒙活動を行っています。

国内でこの運動を行っているNPO法人の「J.POSH」によれば、1年に1度、乳腺・乳房専用のレントゲンであるマンモグラフィの受診を奨励しています。マンモグラフィを使

った検査は、触診では感知できない小さな乳がんまでも検出できる感度の高い検査方法です。所要時間は15分程度とのこと。

現在、日本の女性の20人に1人が乳がんにかかるといわれていますが、早期発見・早期診断・早期治療を行えば、大切な命を救うことができます。女性のお客さまには販売する保険概要だけでなく、乳がんの基礎知識を話したり、定期検診の受診のアドバイスも行いましょう！

乳がん体験から医療を考える市民団体

CFP® ● 山田静江

イデアフォーは、乳がん患者が最良の治療を受けられるように医療を変えていこうという目的で1989年に設立された市民グループです。会員数は450名（2009年3月現在）。

名前の由来はイデア＝IDEA（理念・考え・意見）と、フォー＝For（ために）とFour（4者…患者・家族・医療従事者・社会）を組み合わせたもの。「自らの乳がん治療体験を生かして、4者のために、患者の権利の確立した、より良い医療実現を目指しています」（世話人の山田さん）。

医療改革のための社会的な活動から患者やその家族へのきめ細かな支援まで、会員のボランティア活動に支えられながら、地に足のついた活動を展開しています。

<情報提供>

- 「イデアフォー通信」の発行（年4回）
- 各種講演会やセミナーの開催
- 乳がん治療に関する病院アンケートの実施とまとめ

<患者サポート>

無料電話相談、おしゃべりサロン、再発おしゃべりサロン、体験記、乳がん関連お勧め本など

<アドボカシー活動>

要望書の提出、医療行政への働きかけ、医療関係者との